

2020年度 第23回広島ユネスコ活動奨励賞

～活動奨励賞授賞式 ピアノコンサート～

主催 広島ユネスコ協会 後援 広島市教育委員会



2020年度のユネスコ活動奨励賞は、候補推薦委員会から推薦された学校・団体が選考委員会による厳正な審査を経て、活動内容が高く評価された学校部門3校、社会部門4団体の計7団体に授与されました。

今回、受賞対象となった活動は、防災・自然環境保護・多文化共生社会の構築・平和貢献などをテーマとし、継続性、具体性を持ち、国連が掲げるSDGs（持続可能な開発目標）に合致した内容となっているものです。

授賞式は、コロナ渦のため例年よりも縮小し、式典と活動発表、ピアノコンサートなどで構成され、参加者は会員のみで行われました。

授賞式



開会あいさつ（松岡会長）





広島市長祝辞（代読）



司会（湯浅教育部会長）





活動発表





ピアノコンサート

今年のコンサートは、様々なコンサートやコンクールなどで活躍中の、お二人のピアニストに親しみやすく優しい曲を演奏していただき、会場を和ませました。



坂本さん



笠井さん



お二人での演奏



閉会挨拶（畑口副会長）

第 23 回広島ユネスコ活動奨励賞受賞校・団体

<学校部門 3 校>

■広島市立三入小学校（校長 坂口 由紀子）

～好きです！ふるさと三入～防災学習「命を守るために」



当校のある三入学区は、2014年8月20日に広島市北部を襲った豪雨により、甚大な土砂災害の被害を経験した。当時の被災状況の深刻さや復旧に当たる地域・行政の協力の様子を目の当たりにした当時6年生の「みんなに伝えたい」という思いから、当校の防災学習が始まっている。

被災直後の9月から、6年生は総合的な学習の時間や社会科の時間を活用し、「ふるさと三入」の復興と地域の防災について課題を設定し探究活動を行った。翌年には、5年生も参加し、「8・20災害を越えて」をテーマに社会科・理科・総合的な学習の時間を活用して取り組みを進めた。2016年からは、全学年でそれぞれの学年に応じたテーマを設定し、地域住民の協力も得ながら独自教材による充実した取り組みが現在まで継続されている。

加えて、地域に伝わる民話を元に自然災害の脅威や防災の必要性を盛り込んだ紙芝居を作成し、地域への発表を行い、継承の一翼を担っている。また、豪雨体験や土嚢づくり、HUG訓練（避難所運営ゲーム）、DIG訓練（災害図上訓練）など、より実践的な活動を通して防災の知識や自覚を育てるとともに、地域に愛情を持ち、地域の未来を考える力を育てている。

■広島市立船越中学校（校長 升原 一昭）

～誰故草（エヒメアヤメ）の保存活動と地域行事を柱とした地域貢献活動の充実～



誰故草（エヒメアヤメ）は、鎌倉時代や江戸時代には瀬戸内海沿岸の山地や草原などに自生していたが、移植や栽培は大変難しく、現在ではほとんど目にすることができなくなった国の絶滅危惧種Ⅱ類指定の植物である。

過去には、当校周辺の山野にも可憐な花を咲かせた姿を数多く見ることもできたようであるが、時代の流れの中で完全に絶滅してしまっていた。当校は、地域の有志からなる「船越誰故草保存会」（1979年発足）と連携して、2000年からこの誰故草を保存・復活する取り組みに参加している。株分けができない植物であり、保存会メンバーが自宅などで種から株にまで生長させてきた40～60株を、毎年グラウンド傾斜地や校庭に手植えし、

1年間を通して水やりや草取りなどをしつつ大切に見守り、生育範囲の拡大を目指している。2015年からは、芝桜の苗の植え付けも行い、繁殖する範囲を広げている。

また、9月に実施される敬老祝賀会においては、生徒たちが運営ボランティアとして活躍するとともに、マリーゴールドを種から育てて生長させ、開花した花とお祝いカードを高齢者一人一人に手渡している。その他にも、安芸区民まつりや鬼フェス（地域の岩瀧神社の秋まつり）、地域清掃など、地域の各種行事に生徒を積極的に参加させることを通して、地域社会に貢献し郷土や自然環境を大切にしようとする心を育てている。

■広島県立五日市高等学校（校長 沖田 浩二）

～新たな学びの創造～

グローバルで地域貢献できる生徒の育成

SUSTAINABLE DEVELOPMENT GOALS



当校は、1999年発生の「6・29集中豪雨」の甚大な被災地となった団地内に立地し、悲惨な被災状況を目の当たりにしてきた。また、2014年には隣接の広島市安佐南区・安佐北区を襲う「8・20広島市集中豪雨」災害も起きた。こうしたことにより、その年（2014年）から教育課程内に「防災体験活動」を位置づけ実施してきている。

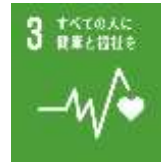
1年生は、「災害探究プロジェクト」という自然災害の原因・減災について学ぶ活動を行い、2年生は、消防局職員を講師に心肺蘇生法や止血・骨折に関わる応急手当などの「救急体験活動」に取り組んでいる。3年生は、「防災カードゲーム『クロスロード～市民編～』（市販）を用い、防災に関する知識・情報を総合的に捉え、即座に判断し行動が求められるゲーム形式の活動を実施している。更に、生徒会執行部は、団地内にある小学校に出向いて「防災マップ出前授業」を行い、後日その防災マップを用いた「防災ピクニック体験活動」を実施して、小学生と防災への知識や心構えを確認し合っている。

当校は、海外2ヶ国の学校と姉妹校交流を行うなど、グローバル社会に対応する人材育成に努めるとともに、このように地域における防災を意識しつつ迅速で適切な行動が取れ、地域に貢献できる生徒の育成を目指して取り組みの充実を図っている。

※ グローカル……グローバル+ローカル

<社会部門 4 団体>

■市民グループええじゃん（ASIAN）（代表 栗林 克行） ～多文化共生社会の実現を目指して～



この団体は、2004年から今日まで在住外国人との交流を深めてきている。その中で、外国人が困った時に必要な多言語相談窓口や通訳者の派遣、普段の生活情報の提供などが大切と考え、取り組みを進めてきている。その他、外国人への無料相談会や日本語教室の開催、就労支援、FM放送やネットを活用して生活情報等を多言語で発信するなどしてきている。

また、問題の多くは、周囲の日本人との間の言葉・文化・制度の壁に起因するものであることから、日本人と外国人親子との交流を進めるための「親子図書館」の開館、日系外国人の子どもたちへの学習支援のための「宮島国際塾」の開催や相談窓口の紹介などにも取り組んできた。更には、日常的に起こる外国人とのトラブルや事例を想定した体験会（交通事故、医療、被災等）を開催するなど、様々な工夫を凝らして市民の多文化共生意識の醸成に取り組んできた。

2019年からは、多文化共生社会の「転ばぬ先の杖」と題したセミナーやワークショップを開催するなど、学識経験者などを交えて、日本人と外国人が互いの立場を理解し合い、豊かな共生社会の構築につながる新たな取り組みを続けている。

■アース・ミュージアム元宇品構想推進委員会

（委員長 門 隆興）

～自然とふれあい（地球）アースを“想う”共生の場づくり～



この団体は2009年に発足し、国立公園である元宇品を拠点として活動を行っている。会員は現在30名である。当地は、クスノキなどの広葉照葉樹の原生林や断層などの地質現象が見られ、自然が豊かに残されている。広島市民がこの野外博物館とも言える自然に楽しく触れることを通して、地球環境の不思議さや美しさが学び取れる場づくりを目指している。

基本理念には、「ありのままの自然の確保」「自然と出会いの場づくり」「自然学習の場づくり」の3点を掲げている。具体的な活動としては、地元住民・行政・専門家が連携して自然観察ガイド（現在1～3期生が活動）を養成するとともに、ミニガイドブックを作成し、

一般参加者対象の自然観察会「地球さんぽ」をほぼ毎月1回開催している。また、学区内外の小学校や高等学校からの依頼を受け、自然観察学習の支援を行っている。更に、ゆったり歩ける環境の確保、ゴミを捨てにくい雰囲気づくり、「アース・ミュージアム」にふさわしい案内板の整備、美しい風景を体感できる展望台・眺望の確保、危険箇所の安全対策など、10項目にわたる活動に精力的に取り組んでいる。

このように元宇品の自然環境の保護・保全を図り、市民に対して環境保護の意識や関心を高める活動は、持続可能な社会の構築・推進に大きく寄与するものとなっている。

■被爆体験を継承する会（代表 甲斐 晶子） ～核なき平和な世界実現を目指す～

SUSTAINABLE DEVELOPMENT GOALS



この団体は、広島市被爆体験伝承者やピースボランティアなどで構成し、2015年に結成された会である。戦後75年が経過し、原爆被害者の高齢化が進む中で、原爆の悲惨さや核兵器の脅威を伝え、核なき平和な未来を求めて証言する人々は少なくなっている。

こうした現状から、原爆被爆者の体験証言会のみならず、原爆や核兵器廃絶につながる国内外の優れたドキュメンタリー映画の上映会の開催、在米・在独の映画監督と観客をつないでグローバルな視点で戦争や原爆について相互理解を深め合う活動などを続けている。また、在韓被爆者・福島原発事故の被災者・核実験被害者など、核被害への視点をヒロシマだけに留めず、より広げるための学習会や講習会も実施してきている。更には、アウシュヴィッツ強制収容所を訪ね、現地ガイドから戦争遺産の継承や啓発、遺産の保護などについて話を聴くことで当団体の活動に生かしたり、ワルシャワ大学の日本学科生・大学院生などの若者とそれぞれの戦争体験の継承についてディスカッションを行ったりするなど、国際理解と国際交流を深める活動も行っている。

これら多彩な活動を通じ、核兵器廃絶などの問題に対する年代・国境を越えた市民レベルの相互理解と、それに基づく核なき平和な世界の実現を目指している。

■ヒロシマ・フィールドワーク実行委員会（代表 中川 幹朗） ～平和を願う「ヒロシマの心」を伝え継承する～

SUSTAINABLE DEVELOPMENT GOALS



この団体は、1994年から広島平和記念公園及びその周辺を対象地域とする平和活動を実施している。原爆投下により壊滅状態となった旧中島地区を中心に、平和を願う「ヒロシマの心」を伝え継承する目的で各種の活動を行っている。

活動の中心であるフィールドワークには、毎回数十名の参加者があり、平和公園・その周辺の様子や記念碑を巡って原爆の悲惨な影響や平和の構築につながる意識を育てている。更に2003年以降は、旧中島町などの平和公園周辺に住んでいた方を招き、かつての街の様子や暮らしを証言していただいてからフィールドワークを実施することとし、参加者への理解・啓発がより深まっている。

フィールドワークや証言内容は、毎年冊子にまとめて刊行している。9冊目となった2019年には、原爆資料館本館敷地での発掘調査で見つかった貿易商の生家の記録や家族の写真を広島女学院高校生や東京大学研究者が共同でカラー化した画像も掲載されている。また、2020年には、鉛筆画集「消えた町 記憶をたどり」の英語版も刊行するなど、活動成果が具体的・継続的になされてきた。

こうした被爆地に密着した証言とフィールドワークの実施は、参加者に原爆の悲惨さと平和の大切さを考える機会を提供するもので、次の世代への堅実な継承活動となっている。

講 評

—第23回広島ユネスコ活動奨励賞—

2021年1月30日

選考委員会委員長

広島大学 由井義通

第23回広島ユネスコ活動奨励賞を受賞された皆様、おめでとうございます。COVID-19の世界的で深刻なパンデミックの状態の中、今年もこのような事業が継続されたことは、事業の企画運営をされている広島ユネスコ協会の関係の皆様のご努力の賜物と思います。

募集要項に記載されていますように、本賞はユネスコ精神の理念を踏まえた「平和の文化」を築く実践的な活動の育成という趣旨に基づいて、活動内容について選考を行いました。審査対象の件数は学校部門が3件、社会部門が4件でした。昨年と比較して審査対象の件数は少なくなっていますが、審査対象の活動の内容は例年並みに内容の濃い素晴らしい活動ばかりであったと思います。

審査会での評価の観点には、活動が創意工夫に溢れているか、継続して3年以上の活動で、年間を通して複数にわたって活動しているか、参加者数はどれくらいで社会への影響が大きい活動か、などを総合的に判断しました。また、それぞれの活動がユネスコの理念とどのように関連しているかという観点も重視しました。

最初に学校部門ですが、広島市立三入小学校と広島県立五日市高等学校による地域と連携した防災学習、広島市立船越中学校によるエヒメアヤメの保存活動、など、環境保護や防災による持続可能な社会づくりという観点は、ユネスコが担ったESDの実践といえます。生徒と地域が連携した活動は、地域社会の担い手づくりにおいて期待ができます。

次に社会部門ですが、「市民グループええじゃん」による外国人支援活動、「アース・ミュージアム元宇品構想推進委員会」による自然保護活動と自然学習の取り組み、「被爆体

験を継承する会」による被爆者の証言や核兵器廃絶に関する映像学習、同様に「ヒロシマ・フィールドワーク実行委員会」による被爆証言の記録作成、など多文化共生、環境保全、平和に関連した活動が評価されました。特に、「アース・ミュージアム元宇品構想推進委員会」の活動は、活動への参加者が多いだけでなく、地域と住民、学校、行政などとの多様なステークホルダーとのつながりで活動がされていて、次世代の担い手育成が図られていることを高く評価しました。

学校部門と社会部門のいずれにおいても素晴らしい活動をしているのですが、活動のエビデンスをいかにアピールするかということについては改善ができるものがいくつかあるように思います。

目立たなくても地道に継続されている優れた取り組みは、必ず社会のためになっていて素晴らしいのは間違いないのですが、素晴らしい活動を仲間内の閉じた関係に留めるのではなく、社会にアピールすることによって活動の輪を広げることも大事になっていると思います。

今回、受賞された学校や団体の活動に関わる皆様方には、この奨励賞をきっかけにして、仲間のネットワークを広げたり、次の世代の担い手を育成するなど、活動の新たな広がりや取り組みへとつなげていただくとともに国内や世界に向けて発信して欲しいものです。皆様方のますますのご活躍を祈念しております。

<解説>

【SDG s とは?】

- SDG s (持続可能な開発目標) とは、「Sustainable Development Goals」の略称で、2015年の国連サミットで採択された2030年までに達成するために掲げられた17の行動目標です。

「平和に暮らすことを阻むあらゆる状況」について、発展途上国、先進国を問わず国際社会が一丸となって解決していこうと掲げた、世界を変えるための目標です。

SUSTAINABLE DEVELOPMENT GOALS

世界を変えるための17の目標



■ 行動目標

- 1 貧困をなくそう！……あらゆる場所で、あらゆる形態の貧困に終止符を打つ。
- 2 飢餓をゼロに！……飢餓に終止符を打ち、食糧の安定確保と栄養状態の改善を達成するとともに、持続可能な農業を推進する。
- 3 すべての人に健康と福祉を！……あらゆる年齢のすべての人の健康的な生活を確保し、福祉を推進する。
- 4 質の高い教育をみんなに！……すべての人に包括的かつ公平で質の高い教育を提供し、生涯学習の機会を促進する。
- 5 ジェンダー平等を実現しよう！……ジェンダーの平等を達成し、すべての女性と女児のエンパワーメントを図る。
- 6 安全な水とトイレを世界中に！……すべての人に水と衛生へのアクセスと持続可能な管理を確保する。
- 7 エネルギーをみんなに、そしてクリーンに！……すべての人々に手ごろで信頼でき持続可能かつ現代的なエネルギーへのアクセスを確保する。
- 8 働きがいも経済成長も！……すべての人のための持続的、包括的かつ持続可能な経済成長、生産的な完全雇用及び働きがいのある人間らしい仕事を推進する。
- 9 産業と技術革新の基盤をつくろう！……強靱なインフラを整備し、包括的で持続可能な産業化を推進するとともに、技術革新の拡大を図る。
- 10 人や国の不平等をなくそう！……国内及び国家間の格差を是正する。
- 11 住み続けられるまちづくりを！……都市と人間の居住地を包括的、安全、強靱かつ持続可能にする。
- 12 つくる責任、つかう責任！……持続可能な消費と生産の形態を確保する。
- 13 気候変動に具体的な対策を！……気候変動とその影響に立ち向かうため、緊急対策を講じる。
- 14 海の豊かさを守ろう！……海洋と海洋資源を持続可能な開発に向けて保全し、持続可能な形で利用する。

- 15 陸の豊かさも守ろう！……陸上生態系の保護、回復及び持続可能な利用の推進、森林の持続可能な管理、砂漠化への対処、並びに土地劣化の阻止・防止、及び生物多様性損失の阻止を図る。
- 16 平和と公正をすべての人に！……持続可能な開発に向けて平和で包括的な社会を推進し、すべての人に司法へのアクセスを提供するとともに、あらゆるレベルにおいて効果的で責任ある包括的な制度を構築する。
- 17 パートナーシップで目標を達成しよう！……持続可能な開発に向けて実施手段を強化し、グローバル・パートナーシップを活性化する。